勇者の血筋

ソムニウム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者の血筋

【Ｎコード】
Ｎ２５９５Ｖ

【作者名】
ソムニウム

【あらすじ】
勇者アキの引退宣言が高らかに発表されてから二年後。
新たなる勇者が召喚された。
その勇者とは……。

王宮の謁見の間が、即席の記者会見の場となり、押し寄せた報道官や貴族たちでざわめいていた。

「わたくし、アキ・ヨシダ・フトチーネは只今より勇者を引退し、ただの侯爵夫人に戻ろうと思います」

きらめく笑顔で背後に控える夫であり、この度めでたく勇人省長官に任命されたセイン・フトチーネ侯爵に視線を向けると同じような眼差しで笑みを返す、微笑ましい夫婦仲は評判を呼んだ。

マケロニ大国における前代未聞の勇者引退会見はそれだけアキが注目されていたことを示し、会見終了後に各国の報道官が報じた、稀代の勇者、名声より女の幸せを選ぶ、という内容は同じ層の貴婦人や専業主婦層から反響が大きかった。

マケロニ大国ではここ数十年かの目覚ましい女性の社会進出で、専業主婦という存在が軽視され始めてきていた風潮もあり、名誉、肩書きを持つ女性が女の幸せを取る、といったことは世間の関心が大きく、また関連層からは絶大な支持を得て、しばらくアキ旋風が巻き起こることになる。

それから二年後、次代の勇者が召還された。

普通の主婦になっていたアキには懐かしい過去と、無縁だとばかりに屋敷の居間から魔鏡に流れる速報を流し見していたのである。

「あー、やっぱアキちゃんだ。ひさしぶり～」

のんびり手を振る今代の勇者一に、アキはのけぞる思いがした。

「はー？　こんなとこにいたんだっ」

大きな瞳から放たれる、目力の強い今代の勇者二にアキは圧倒された。

「ハルっ、ナツっ！　なんで！？」

アキはその腕に抱く、小さな存在も忘れて思わず大声を出した。

うつらうつらし始めていたミルクの香りが愛らしい子は、ふにゃ～とぐずり出し慌ててシッター役の侍女に任せると声を潜めた。

「なんで、あんたたちがいんのよっ」

目眩を覚えるのは、むせかえる花の匂いのせいなのか。それとも目の前の――。

「それ、ひどくない？　アキ姉」

勇者二のナツが眼光鋭く。

「ほんと、姉妹がいがないのねぇ」

勇者一のハルがほんわかと。

そう言った妹たちの存在なのか。

満開の花が咲き誇る庭園を、アキは愛しの天使、と称する幼い息子と散策中、突然の来客を家人から告げられた。

懇意の仲である者たちであれば事前に連絡をよこすはずだが、時折急に屋敷に立ち寄ることもあるし、縁が薄い者たちでも夫の役職がら来訪者というのも少なくなかった。

アキは屋敷を守る女主人だ。にこやかに応対するのは至極当然のことである。

庭先より移動しようとした矢先に、応接室より来客が出向いてきたという形の、アキにとっては思いがけない再会だった。

フトチーネ邸の応接室に移った三姉妹の空気は、再会を喜ぶような穏やかなものとは若干違った。

「ふ～ん、アキ姉がねぇ……」

視線を上から下に、じろじろよこすナツにアキはなんとなくムッとする。

「まあ、なにあれ。アキちゃんが幸せそうでよかったわ。異世界だから、嫁に行けてお母さんにもなれたんだから」

にこやかに言うハルの言葉に、なぜかイラッと気持ちが波立った。

この二年、やっと淑女らしくなってきたと夫のセインから評価され始めてきた、たおやかさが形を潜めそうな気配がして、ぐっと耐えた。

「わたしはマダム、わたしはマダム」

呪文のようにブツブツ唱えて気を静めようとすれば、今代の勇者たちは思わぬことを言い出した。

「なんかさー、王宮ってダルいっ。うちら、こっちに移るからよろしくねー」

ナツが、あっけらかんと言えば。

「今代勇者の役割って王侯貴族の適齢期男性との婚姻なんですってねぇ。もうセクハラ、パワハラばかりで参ってるの。ストレスで王城吹き飛ばしちゃうかも」

頬に手を添えながら、ハルがおっとりと話す。

「あー、ハル姉、わかる、それ。衝撃波、ぶっ放したくなるウザさなんだよねー。いっそ一回、蹴散らしてみようか」

ハルに同意し、けらけら笑うナツに、あら、いいねぇと賛同するハル。

「……やめて。わたしのささやかな幸せまでぶち壊さないで……」

急な再会の今で、どうしてこうも剣呑さ滲む会話をする妹たちな

のか、懇願したアキは溜め息をつきたくなった。

魔力の保有量は、二人とも半端なく大きかった。唯一、ドラゴンを倒せると言われたアキと同等かそれ以上の。

聞けば召還されてから1ヶ月は、みっちりと魔力のコントロールと使い方を指導されたらしい。

要領はいい二人の妹たちのこと。きっと、きっちりマスターしているだろう。

個人情報保護法と守秘義務、そして勇者披露の儀まで今代の勇者たちの詳しい情報は聞いていなかったアキだが、とかく優秀だと勇者管理役のセインが言っていたのを思い出した。

そして二人は、今まで王宮関係者にアキの血縁者だと明かしていないと言った。

何故かとアキは問えば。

「切り札っ」

カードゲームが好きなハルが、にっこり笑う。

「隠し玉っ」

イベントごとが好きなナツが、にやりと笑った。

余興はとっといた方が楽しいよねえ、と面白そうに女特有の甲高い笑い声が応接室に響き、健康優良児だったアキでも、うっすら悪寒を覚えた。

この屋敷に移ることは二人のストレス度からも、この国を守るた

めにも既に決定事項だ。
「ねえ、二人ともこっちにきたら吉田家はどうするの？」
アキが向こうに残してきた家族を思えば、二人の妹たちはきょとんとアキを見た。
「ん～、無理に帰還方法を試してもいいんだけど。帰還方法確立してないってことは、何が起こるかわからないし、安全安心保証ないのがネックなのよねぇ」
のほほんと、ハルが言った。
「えっ、おっそ。いまさら里心？　フユ姉が結婚して婿とったから大丈夫じゃない。誰かさんと違って、さすが長姉とみんな褒めてたし」
ナツがアキをじろりと見ると、アキは視線をそらした。
「なっちゃん、そんなにアキちゃんを責ないで。こんな人でも、あれやこれや吉田家になんらかのトラブル巻き込んだ人でも、消息不明になってもアキちゃんだからと割と捨て置かれても、仕方ないけどわたしたちの姉には変わりないのだから」
穏やかな口調でハルはうふふと笑う。
「いや、ハル姉。悪意全開だから」
ナツが横目で突っ込む。
「おねぇちゃん、泣いてもいいかな」

眉をへの字に下げたアキが言った。

「それに魔女っ子も考えようでは楽しそうよねえ」

ハルが、うっとりとつぶやけば。

「そうだ。アレらをなんとかするか。ステッキもって変身しちゃう？　それとも変身させる？　何にする？　何しちゃう？」

ナツがイベントを企画するような、ウキウキさで話す。

「ハル、ナツ。激しくそれ違う。お願いだから、おねえちゃん平凡に暮らしたいの。あんたたちも、ここでひっそり生きてちょうだい。おねえちゃん、全面協力するから」

もはや涙目のアキに二人の妹たちは、涙もろくなって年だねえ、と笑い合った。

この時からアキは、もう普通の専業主婦から遠のいていく予感がひしひしとした。

アキが職業貴婦人として新たに、名を馳せることになるまでもうしばらくのこと。

アキの夫、勇人省長官セイン・フトチーネ侯爵が、勇者三姉妹の身内として三倍もの盛大な溜め息をつきながら東奔西走し、マケロニ大国における影の最高権力者とまで称されるようになるまであと数年。

（後書き）

勇者三姉妹が再会した時、次女アキ２８才、三女ハル２５才、四女ナツ２３才くらいです。
吉田四姉妹は近隣で良くも悪くも評判の姉妹でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2595v/

勇者の血筋

2011年7月27日22時34分発行